

いふなり、今日或ば明日、粽を親戚に送へし。

〔秋苑日涉〕民間歲節上、五月五日、謂之端午。○中飯蒲酒食糉。○中月令廣義曰、一統賦註、夏至俗食麥粽、歲時記、午日以菰葉裹黏米、謂之角黍、取陰陽包裹之義、又粽卽角黍同類、唐時歲節、端午粽子名品甚多、形制不一、有角粽、錐粽、茭稜、筒粽、秤锤粽、又有百索粽、九子粽、事物紀原、食粽一名角黍。○曰、因屈原也、異苑、屈原姊所作、第八卷、櫻類詳見、山堂肆考曰、歲時記京師以端午爲解櫻節、以糉葉長者勝、短者輸。

〔諸國年中行事大成〕三下五月五日端五○又重五○中略

卷之故、ちまきといふ、今京師は鞍馬山の奥より出る隈篠の弱葉をもつて、團子をつむぎ、其の裏に茅をもつて、其の頭に蘿をもつて、是を篠粽といふ、京師専らござれを用ひる故、四月下旬より此篠を持出し、市中を賣歩行者多し、大坂其餘田舎にては、蘆の葉にてまぐ莘粽といふ、又茲にてまくもあり、菰ちまきと云、今五日禁裏御用粽所川端道喜菰粽を製してまし武家専ら用ひ、又伊勢物語にかざり粽とあるは、種々の色に飾たるをいふと也。

〔伊勢物語〕昔男有けり、人の許より、かざり粽をこせたりける返事に、あやめかり君はぬまにそまどひけるわれば野に出でかるぞわびしき、とてきじをなんやりますける。

〔古今和歌集物十名〕ちまき

のちまきのをくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく

〔古今著聞集飲食〕長谷の前大僧正、五月五日、人々にちまきをくばりけるに、俊惠法師聞て、其うちにいるべきよし申つかはすとてよみける。

あやめをばほかにかりてもふきつべしちまきひくなるうちに入らばや、返し僧正、

はづかしやよどのあやめをおきながらちまきひくなの空にたちぬる

大江千里

〔古今著聞集十九木〕泰覺法印、五月五日、人の許へ菖蒲をつかはすとてよみ侍りける。